

令和3年度 文学部国文学科 一般選抜（中期日程）講評

（一）現代文

【出題意図】

問題文は藤本夕衣「「シェイクスピアの俳句」の余韻」によった。漱石の句「骸骨を叩いて見たる董かな」の成立事情を確認しつつ、この句に込めた漱石の含意を、プレテキストであるシェイクスピアの『ハムレット』との関わりの中で丁寧に論証した文章である。本文の内容理解を測ることを中心に作問した。

【採点のポイント】

問一

漢字の読み書き。文脈に即して正しく読めているか、書けているか。

問二

「ラム（小羊）」が、チャールズ・ラムを意味していることをおさえられているか。また、「著者性」が、シェイクスピア作品を物語に編み直すことを意味していることをおさえられているか。

問三

漱石の「酷評」が坪内逍遙の翻訳に向けられたものであり、漱石がシェイクスピアの詩人性を重視するゆえに「酷評」しているということを理解しているか。

問四

「余白」が漱石の句の作品世界内の時間に関することを理解し、「長くなる」の意味が、ハムレットの台詞の作品世界内の時間以上の時間、そしてさらにそれよりもさらに先の時間をも含み込むという意味であることを理解しているか。

問五

「董」が春の情景を想起させるものであり、そうして想起された春の情景が、人生の一回性と対照的な季節の反復性・循環性によって基礎づけられる季節の時間の長大さを感じさせるものであるということをおさえられているか。

問六

「骸骨の」の漱石の句が、言葉を省略して時間と空間を凝縮するシェイクスピアの詩人としての本領に対する漱石の深い理解を示唆するものであること、また、漱石がそうしたシェイクスピアの詩的本質と親和的な、同じく言葉の省略による意味の凝縮を本領とする俳句という詩型をわざわざ選んでこの句を作っているということがおさえられているか。

【講評】

問一

㊦「功積」、㊧「巧績」、㊨「あんあん」、「たんたん」、㊩「投映」、㊪「圧到」と誤るもの、㊫「据」、「備」と誤るものが多かった。答えは採点者に読んでもらうことから、丁寧に楷書で書くことも大切である。

問二

「本文中の言葉を用いて」という条件があり、その上で、「著者性」という文言に着目し、それは、「物語に編み直す」とことと気づくか否かがポイントであり、解答の差となっている。問いに正対していない解答の仕方が散見するのが、気になる。本文の読解とあわせ、きちんと求めに応じることは重要である。

問三

「漱石」が「酷評」したのはなぜかが問われているが、傍線部に続く次の段落の冒頭が「酷評のポイントは」で始まっているので「翻訳の問題」「日本語の翻訳を許さぬものである」という要素を拾い出すことは容易で、ここを押さえている答案が多かった。ただし、次の段落の「別格の音調」という要素も押さえないと解答としては不十分である。つまり、漱石の「酷評」が坪内逍遙の翻訳に向けられたものであること（翻訳の問題）だけではなく、漱石がシェイクスピアの詩人性を重視するゆえに「酷評」していること（詩の問題—独自の韻律・別格の音調）も押さえる必要があるということである。「本文中の言葉を用いて」という条件を生かして二つの要素を意識して説明していると思われる答案と、「本文中の言葉を用いて」という条件に甘えて何となくつぎはぎした答案とで差が出た。

問四

傍線部の段落をまとめるのだが、主語をハムレットとした場合には「引用の原文」と漱石の俳句の時間的なずれが、時間的な意味での余白を生み出すことになる。それによって、俳句に描かれる時間が、五幕一場「墓掘り」の場面の全体の時間を含み込むことになる、というところまで読めているものは多かった。ただ、そのような時間的な余白の使い方によって、次の段落にある「菫」の季節のような、「墓掘り」の場面の先の時間をも含みうる可能性を開くというところにまで気づいて欲しかった。

問五

「菫」が俳句の季語として春の情景を広く想起させることを押さえたうえで、傍線部直前の「オフィーリアのイメージ以上のもの」を時間的な観点から具体的に過不足なく説明することが必要であるが、内容としてはよく理解されている答案が多かった。設問に対して解答の文末表現が不適切なケースがやや目立った。

問六

筆者が漱石の句をわざわざ「シェイクスピアの俳句」と書いていることの含みを問う問題である。漱石の句が、シェイクスピアの詩人としての本領に対する漱石の深い理解を示すものであるという点についてはおおよそ踏まえられていたが、そのようなシェイクスピアの詩的本領と俳句という詩型とのあいだの親和性については、うまく解答に盛り込めていないものが多かった。この親和性ゆえに、漱石は「シェイクスピア」と「俳句」の双方の本領を活かした「シェイクスピアの俳句」を作り得たわけである。問われている事柄の理路をしっかりとらえて過不足なく解答することが重要である。

(二) 古文

【出題意図】

江戸時代後期、志賀忍の著した『理斎随筆』（天保9年〈1838〉刊、日本随筆大成・第3期所収）に載る、著名な画家である谷文晁のもとを一見風変わりな言動をとる尼が訪れるところから始まる話に取材した。平易な表現で綴られた文章であり、内容を十全に理解したうえで、把握した事柄を適切に表現することができるかを問うている。なお、本文は日本随筆大成に基づいたが、表記は理解しやすいように全面的に改めた。

【採点のポイント】

問一

①「何とて」にそくして、疑問文として訳出されているか。②「かく」「情なく」が適切に訳されているか。③「おはす」が尊敬の意で訳出されているか。

問二

①「誰の」が適切にとらえられているか。②「心持ち」が具体的に示されているか。

問三

それぞれ、品詞と終止形が正しく書けていることが、得点の前提となる。活用形のみ誤っている場合は、部分点を与えた。

問四

①「何について」が適切に示されているか。②「妙音」「申すもおろかなり」という評価が適切に説明されているか。

問五

①「誰の」が適切に示され、「どのような様子」か、具体的に記されているか。②理由が本文にそくして適切に説明されているか。

【講評】

問一

採点のポイントのうち、①と②の点についてはよくできていた。しかし、③の「おはす」については尊敬の意で訳していない答案が思ったより多かった。言葉の意味・用法をしかと押さえることが必要である。

問二

採点のポイントの①の点についてはよくできていた。②の「心持ち」については、文章の後ろの方にある尼の舞を見てみたいと思っていると記した答案が多く見られた。しかし、当該箇所「うかがひ見る」対象にはまだその内容は含まれず、ここでは一見したところ風変わりな尼の様子に対する好奇心が中心である。場面展開の文脈を押さえて答えることが大切である。

問三

よくできていた。(1)を「らむ」「めり」と混同したり、(2)を助動詞や補助動詞、「しばらくす」という複合動詞としたりする誤り、また終止形を「する」としてしまった誤りがあった。

た。(なお(2)については「サ行変格活用」という活用型まで示した解答が半分ほどあった。「す」＝サ変動詞が条件反射になっているようで微笑ましかった。) (3)も形容詞の活用形とする誤りなどがあったが、いずれも基本的な文法知識の不足というしかない。

問四

全体としてよくできていた。①「何について」は、ここでは尼の発した「唄」の声である。「舞」としている答案が少なくなかったが、正確ではなく、減点した。②「妙音」は、ここではすばらしい歌声をいっている。「奇妙な音」と誤る答案が散見された。また、「言葉にできないほどである」までで止まっている答案もあったが、「(～ほど) すばらしい」という評価を明示することが必要である。

問五

①②とも全体としてよくできていた。傍線部エは、尼の舞があまりにすばらしかったので、それを見た誰もがぜひもう一回舞うのを見たいと望んだという趣旨である。多くは適切に把握され、説明されていたが、「望まぬは無かりける」を「望まない者はいなかった」の意ではなく、「望まないことはない」と理解がずれている答案も散見された。文意を正確にとらえ、内容を正確に表現することが大切である。

(三) 漢文

【出題意図】

今年度は『説苑』からの出題。総字数約百三十字で、ほぼ例年なみの長さの文章。送り点・送り仮名を手がかりに内容を正しく読み取る力を備えているか、また、送り点の付け方や、基本的な語句の読みなど、漢文を読むための基礎的な学力が定着しているかを主眼に出題した。

【採点のポイント】

問一

基本的な語彙についての読み方を問う問題。A「あつ」という読みは現代日本語では使わないが、「的中・命中」等の熟語から考えれば、正解できる問題。B・Cの「若」は「ごとし・もし・しく・なんぢ(じ)」等、様々な意味用法のある重要助字。いずれも基礎的な学力を問う問題。Aは「あてる」・「あたる」どちらも正解とした。Bは「なんぢ」が正解。漢文は古典に含まれるので旧仮名遣いが望ましいが、新仮名遣いの答案も正解とした。Cは「ごとくんば・ごとくなれば・ごとき」等、色々な解答があったが、文脈に合っている読み方は全て正解とした。送り仮名の適切でないものについては、減点した。

問二

書き下し文に従って送り点を正しく付けられるかをみる問題。送り点を付ける問題は、ほぼ毎年出題している。入門期の学習が定着していれば、平易な問題。完答の場合のみ点を与えた。本学科受験を希望する者は、送り点の付け方ぐらひはしっかりと学習しておいてほしい。

問三

内容の読解ができているかを問う問題。登場人物は呉王と伍子胥の二人、「白龍・予且・天帝」は、伍子胥の例え話に登場する者で、魚に姿を変えて下界に下りた白龍が、身をやつして民のところに出かける呉王の喩えであることを読み取れば、正解できるはず。誤字は減点、二十五字に満たない答案は0点とした。

【講評】

問一

おおむねよくできていたが、送り仮名を適切に付けられていない解答が多かった。文脈を考え、正しく活用すること。

問二

おおむねできていた。しっかりと勉強しておきたい。

問三

正解率が低かった。文章の内容を理解出来ていない答案が多く、また、傍線部中の「患」字を病気と誤解していると思われる答案も少なくなかった。また、三十五字という字数制限の中に、必要な情報を盛り込めていない答案も散見された。字数制限のある問題の演習も、普段からしっかりとやっておきたい。